

おすすめ児童書リスト

選者

川端有子

日本女子大学家政学部教授
京都市生まれ。神戸大学文学部、関西学院大学文学研究科博士課程、ローハンプトン大学(UK)博士課程博士号取得。愛知県立大学外国語学部教授を経て、現職。「児童文学」、「幼年文学」などの授業を担当。著書に『少女小説から世界が見える』(河出書房新社)、『児童文学の教科書』(玉川大学出版部)、共著に『映画になった児童文学』(玉川大学出版部)、翻訳にジェーン・ドゥーナン『絵本の絵を読む』(共訳)などがある。

戸田山みどり

八戸工業高等専門学校教授
東京大学文学部卒、名古屋大学大学院博士課程修了、博士(学術:国際コミュニケーション)。おもに英語圏の児童文学と絵本に関心がある。愛知県立大学等の非常勤講師を経て、2001年より八戸高専に勤務。英語の授業や日本語での論文の書き方指導も担当。学生と一緒に絵本を使った遊びの会やクリスマス絵本の展示を毎年行っている。演劇部顧問として、子どもと演劇も研究テーマの一つになりつつある。

いやいやえん

中川 李枝子 作 大村 百合子 絵 福音館書店



この本には全部で7編、ちゅーりっぷほいくえん・ばらぐみのしげるが登場するお話がおさめられている。どこでもしげるは大活躍だが、なんといっても圧巻はタイトルにもなっている「いやいやえん」だ。この50年間子どもの本はたくさん書かれてきたが、未だに彼を超える子どもらしい子どもはいないのではないと思う。

ごきげんなすてご

いとう ひろし 作・絵 徳間書店



おさるのような弟ばかりかわいがられる家なんて出ていってやる、と「あたし」は自ら捨て子になる。自分だけをかわいがってくれる家にもらわれるんだ、という決意は固い。でも、ネコや子犬とちがって人間の子どもはなかなか拾ってもらえない。「あたし」の運命やいかに? 一人称小説なので1人で読みたい。自立の一步にふさわしいお話。

ジェインのもうふ

アーサー=ミラー 作 アル=パーカー 絵 偕成社



赤ちゃんからよちよち歩きへ、よちよち歩きから幼児へ、そして自転車に乗り学校へ行く年頃の子どもへ。ジェインの成長が、ピンクの毛布がくたくたになっていく様子と対照的に描かれる。そして最後の一步は、より小さいものをいつくしむ心を持つことだ。

ももいろのきりん

中川 李枝子 作・絵 福音館書店



るこちゃんの闊達なクリエイターぶりは、同じ作家によるぐりとぐらののんびりした感じやしげるのやんちゃぶりとはまたひと味違う。もも色の紙からつくりだされたきりんのキリカも意外にたくましく、物語に登場するクレヨンのように鮮やかな冒険ものがたりだ。



おさるになるひ

いとう ひろし 作・絵 講談社



南の島のおさるの世界は平和だ。おさるの子もたちは日がな一日遊んで暮らす。そんな子どもにも悩む日がある。お兄ちゃんになるというのに、自分がほんとうにお母さんから産まれたのか、どのように大きくなったか、何もおぼえていないことに気づいてしまったのだ。そして、赤ちゃんだった頃のことを聞いてようやく安心するのである。

へんてこもりにいこうよ

たかどの ほうこ 作・絵 偕成社



外国の人ヘンテ・コスタさんがつくった「ヘンテ・コスタの森」通称「へんてこもり」。名前しか出てこないけど、このヘンテ・コスタ氏はただものではなさそう。ヤカン目マルヤカン科のまるぼくんが生息しているところを見ると、コスタ氏はお茶が好きなのかな?

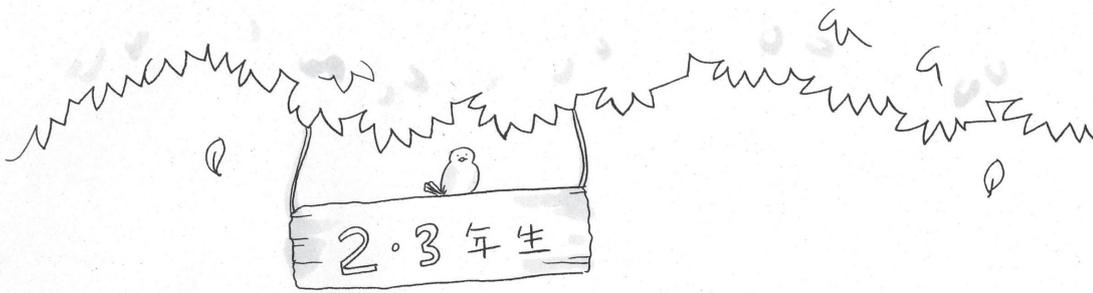
エルマーのぼうけん

ルース・スタイリス・ガネット 作
ルース・クリスマン・ガネット 絵 福音館書店



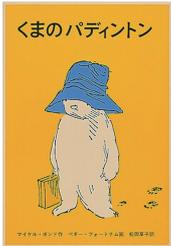
この冒険物語では、おそろしい竜からかわいそうなかたが助けられるのではない。救出されるのはかわいそうな竜(子どもだけ)のほうだ。しかも、エルマーが冒険の旅に出るのは、そもそも情け容赦のないお母さんに愛想をつかしたから。この作品は児童文学の古典と言えるほど息が長いけれど、この時点ですでに型破りだったのね。

シリーズの『エルマーとりゅう』『エルマーと16びきのりゅう』も、あわせてお楽しみください。



くまのパディントン

マイケル・ボンド 作 ペギー・フォートナム 絵 福音館書店



ペルーからやってきたとても小さいくまに、出会った駅の名前をつけて家にひきとったブラウンさん一家。パディントンは見事な失敗ばかりしてかすのだが、やがて、彼のいない生活なんて考えられない、というロンドンの家族に、大英帝国をやめてもなお残っていた心の余裕を感じるなあ（そして、今はどうなっているのだろうか）。

こねこのトムのおはなし

ビアトリクス・ポター 作・絵 福音館書店



ピーター・ラビットのシリーズには含蓄のある物語が多いが、そのなかで最もストレートにはらはらどきどきする冒険ものがこれ。相手がネズミだからといってあなどってはいけない。でも、男の子はいつだって、お母さんのいうことはきかないものだ。

ジャックと豆のつる -イギリス民話選

ジョセフ・ジェイコブス 作 瀬川康男 絵 岩波書店



みんながよく知っている三匹の子ブタのおはなし、でもほんとうはこんなに長くて、オオカミと知恵くらべをしてどうとう勝利した三番目の子ブタが、オオカミをゆでて食べちゃうっていう結末は知ってたかな？有名なお話も、それほど知られていないお話も含め、イギリスの昔話を、昔話らしい方言の口調で語る木下順二の名訳が楽しい。

くまのプーさん

A.A.ミルン 作・絵 岩波書店



くいしんぼうで天然な性格がわざわざいして、いろんな騒動に巻き込まれてしまうんだけど、いつもクリストファー・ロビンが助けてくれるからだいじょうぶ。森の中にはコブタやウサギやフクロウや、ロバのイーヨーなんかいてみんな個性豊かな存在だ。今日ものんびりおやつ時間のほちみつのことを夢見ているプーさんです。

大どろぼうホッツェンプロッツ

プロイスラー 作 トリップ 絵 偕成社

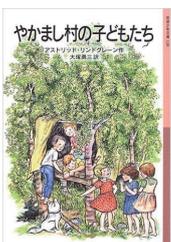


このお話に登場する悪漢たちは実にはかけねなしの悪党である。とくに大魔法使いは情けのかけらもない。この物語の痛快さは彼らの悪役ぶりのたまものと言えるだろう。読んでみると無性にじゃがいも料理（これが重要な役割を果たす）を食べたくなるというオマケつき。

シリーズの『大どろぼうホッツェンプロッツふたたびあらわる』『大どろぼうホッツェンプロッツさん三たびあらわる』もあわせてお楽しみください。

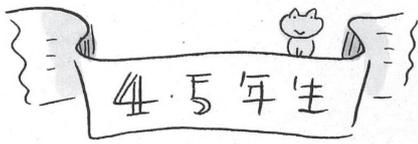
やかまし村の子どもたち リンドグリーン作品集(4)

アストリッド・リンドグリーン 作 イロン・ヴィークランド 絵 岩波書店



スウェーデンの山の小さな村には三軒の家しかなくて、子どもたちは全部で6人。学校へ行くにも、長い道を歩いていかなければならないけれど、そしてときどきはけんかも仲たがいがもするけれど、やかまし村の子どもたちはみんなとてもなかよしだ。豊かな、そして時には厳しい自然の中、四季折々のなにげない生活が丁寧に描かれる。





風にのってきたメアリー・ポピンズ

P.L.トラヴァース 作 メアリー・シェパード 絵 岩波書店



不思議な力を持ったナース(乳母)がバンクス家に来てきた! 生きてオウム頭のついた傘、空っぽなのになんでも出てくるじゅうたんバッグ。階段の手すりをすべりあがって、子どもたちに向かって冷たくフン、と鼻をならす。いやおうなくメアリー・ポピンズのペースに巻き込まれていく子どもたちは、ごく普通の毎日に何を見つけたでしょう?

カイウスはばかだ

ヘンリー・ウィンターヘルト 作 シャルロット・クライネルト 絵 岩波書店



ローマ時代の子どもの話だなんて、想像を絶すると思いがちだが、あまり気にする必要がないことは読んでみるとわかる。もっとも、現代の欧米の人々には公衆浴場というものがどのようなものか、わかりにくいかもしれないけれど、このところのローマ風呂ブームに湧く日本の読者には、むしろなじみ深い感じがあるのでは。

床下の小人たち—小人の冒険シリーズ (1)

メアリー・ノートン 作 ダイアナ・スタンレー 絵 岩波書店



ピンとか、編針とか、小さなものがよく無くなるのは、小人が借りていくからかもしれない…。人間のものを「借り」て暮らしている小人族のアリエッティとその両親。お屋敷に越してきた孤独な少年は、彼らと友情をはぐくむが、その交流は続かなかった。大人たちが物の紛失を怪しみだしたからだ。アニメ『借り暮らしのアリエッティ』の原作。

ふたりのロッテ

エーリヒ・ケストナー 作 ヴァルター・トリアー 絵 岩波書店



出版された第二次世界大戦直後、ドイツはまさにこの双子たちのように分断されていた。だが、ここにはそういった政治的事情はまったく触れられていない。だからこそ逆に大人の都合に振りまわされる子どもの無力さとそれに屈しない強さが普遍性をもって訴えるのだろう。

新イラスト版 コロボックル物語 1

だれも知らない小さな国 (児童文学創作シリーズ)

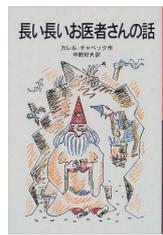
佐藤 さとる 作 村上 勉 絵 福音館書店



少年のころ、山で見かけた小さな小さな人の影。忘れられずにその小山を再訪した「ぼく」は、人間から隠れて住み続けてきたコロボックルの一族を知る。かつては戦争が、そして今は高度開発の波が、自然やひとの心を変えてゆく、そんな時代の流れにあらがって、ちいさなちいさな存在と彼らを愛して守ろうとした人間の物語。

長い長いお医者さんのはなし

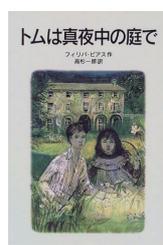
カレル・チャペック 作 ヨセフ・チャペック 絵 岩波書店



のどに種を詰まらせてしまってお医者を呼ぶ魔法使い、リウマチになったカップパ、ハリウッド女優になる妖精、宛先のない手紙を配達するために一年かける郵便屋さん、公園で迷子になったリスを救出する警察官、七つの頭を持つヒドラを飼うことになった男の話、現代の都会の中に、昔話がよくみえる。ユーモラスな連作短編集。

トムは真夜中の庭で

フィリパ・ピアス 作 スーザン・アインツィヒ 絵 岩波書店



おじとお婆のアパートに預けられたトムは退屈しきっていた。ある夜、大時計が13時を打ち、不思議に思ったトムがドアを開けると、何もなかったはずの場所に、花咲き乱れる美しい庭が広がっていた。そこでトムはハティという少女と知り合いになるが、昼間になるとその庭は消えてなくなっている…。時を超えて交錯する人生の物語。

ムギと王さま 本の小べや

エリナー・ファージョン 作 エドワード・アーディゾーニ 絵 岩波書店



27の短編は寓話風のもの、昔話風のもの、伝奇小説的なもの、子どもの現実の生活を切り取ったものなど様々だが、ほぼどれも小さなものの夢や期待が描かれている。しんぼうづいグリゼルダや口数の少ない木こりなど、多くが報われる(でも、すべてではない)ところに読者は安心するだろう。

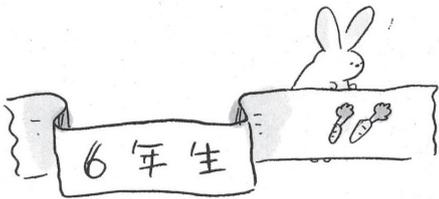
たのしいムーミン一家

トーベ・ヤンソン 作・絵 講談社



ムーミントロールの丸っこい姿はキャラクターとしてすっかりひとり歩きしているようだが、ムーミンたちの世界に深みを与えているのは、キャラクターとしての人気はいまいちらしいスニフやスノーク兄の存在なのだ(妹のスノークのお嬢さんの言動も、実はなかなかのもの)。





秘密の花園 (上・下)

フランシス・ホジソン バーネット 作 シャーリー・ヒューズ 絵 岩波書店



親を亡くして伯父の屋敷に引き取られたメアリーは、鍵のかかったバラの廃園を見つけ出し、その庭をよみがえらせることに夢中になった。自然児ディッコンの助けを借りて、冬から春になる季節の変化とともに庭が生き返っていくにつれ、メアリーも、屋敷に閉じこもっていたいとこのコリンも、奪われていた子ども時代を生きなおすことになる。

トム・ソーヤーの冒険 (上・下)

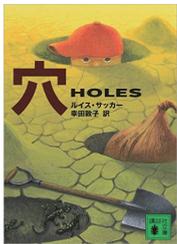
マーク トウェイン 作 T.W.ウィリアムズ 絵 岩波書店



宝さがし、山賊ごっこ、家出、野宿。男の子なら、一度はやってみたい冒険がつぎつぎ繰り広げられる。それが子どもたちだけの遊びだったときはよかったのだけれど、ほんもの人殺しに巻き込まれ、犯人と一緒に洞窟に閉じ込められてしまったとしたら？学校嫌いで伯母さん泣かせのトム・ソーヤーが活躍する、古き良き時代のアメリカの物語。

穴

ルイス・サッカー 作 講談社



スニーカーを盗んだという濡れ衣を着せられ、少年犯罪矯正キャンプに送られてしまった運の悪いスタンリー。そこで少年たちは、カンカン照りの日差しの中でひたすら穴を掘り続けるよう強要されている。これはもしかして、先祖の犯した罪の報いなのか？いくつもの物語の筋が絡み合うも、結末で見事に一つにまとまる豊かな語りの世界。

クローディアの秘密

E.L. カニグズバーグ 作 岩波書店



たいていの読者はクローディアの気持ちになって読むだろう。気のきいた子どもなら、9歳の弟ジェイミーに共感するかも。大人になったら、書き手のフランクワイラー夫人の気持ちがわかるようになるかもしれない。でも、この報告書の提出先である弁護士サクソンバーグ氏の気持ちになるにはかなり想像力が必要だろうなあ。

山賊のむすめローニャ

アストリッド・リンドグリーン 作 イロン・ヴィークランド 絵 岩波書店



歴史物というわけでもなく、かといって魔法ファンタジーでもない。人間社会がもっと素朴で自然に近い生活をしていたら、という、ある種、極端なまでに単純化された世界が舞台だ。そこでは文明のヴェールが薄いぶん、親と子の葛藤は苦しみも喜びも鮮明で、ほとんど息苦しくなるほどである。それだけ、結末の開放感も大きい。

名探偵カッレくん

アストリッド・リンドグリーン 作 エーヴァ・ラウレル 絵 岩波書店



カッレくんが信じているように、冒険は思いがけないところで待っている、と思えてしまう。スウェーデンの夏休みはなんて長いのだろう、夏の一日はなんて長いのだろう、などということは本を読み終わってから考えることかもしれない。

ぼくがぼくであること

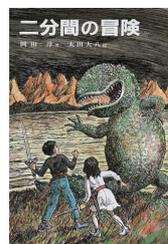
山中 恒 作 下田 昌克 絵 岩波書店



児童文学の本質をひとことで表したタイトルだ(ただし、主人公は終始自分をおれと呼んでいるが)。社会の表面は出版当時からずいぶん変わったが(国電がJRになった以上に)、子どもと大人の力関係の構造は変わっていないし、子どもにとって必要なことも変わっていない。

二分間の冒険

岡田 淳 作 太田 大八 絵 講談社



作者は小学校で図工を教えていたという。だからかもしれないが、この二分間の冒険はまったくの別世界のできごとのはずなのに、読み終わると学校のことをいろいろと考えさせられる。たしかに、この冒険は主人公が学校の体育館と保健室のあいだの校庭にいるあいだに起きたことではあるのだけれどね。

つづきの図書館

柏葉 幸子 作 山本 容子 絵 講談社



本の続きではない。読者の続きの物語だ。4つのエピソードにはそれぞれ読者だった子どものその後を知りたがる絵本の登場人物(!)が現れる。しかし、彼らに振りまわされる主人公の桃さんは子どもではない。ではなぜ、この本が児童書の棚に？どの大人も子どもの続きだからだね。

こちらに掲載されている本は、すべて市内書店で注文することができます。

蔵書があるものについては、図書館でも貸し出し可能です。(詳しくは図書館へお問い合わせください)
なお、このリストに関するお問い合わせは、八戸ブックセンターまでお願いいたします。

八戸ブックセンター

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F
TEL 0178-20-8368 FAX 0178-20-8218
web <https://8book.jp/>